

〈論文〉

看護系学生と非看護系学生および保育系学生の 乳幼児に対するイメージの比較

細野 恵子, 市川 正人, 上野 美代子

A comparison of the perception of infants held by college students in nursing,
non-nursing and early childhood education programs

Keiko HOSONO, Masato ICHIKAWA, Miyoko UENO

名寄市立大学保健福祉学部看護学科

The purpose of this study is to understand the characteristics of the perception of infants held by students at the researchers' university and to compare the image held by nursing students with students from other courses of study in order to clarify particular issues for pediatric nursing education. A total of 54 nursing, 40 nutrition science, 52 social welfare, and 57 early childhood education students, all in first year, participated in this study. The survey was conducted using the 51 pairs of adjective opposites developed Inoue et al (1985) for measuring subjects' views of children. Allowing some time for acclimatization to university life, students were asked to complete the survey in the period around the end of April to the beginning of May, before they had made any significant progress in their specialized fields of study. Results were divided into three groups – nursing students, non-nursing students and childcare-related students – and factor analysis using a promax rotation was conducted. After analysis, survey items with a factor loading lower than 0.4 were discarded, with the result that 34 ~ 42 items in 5 factors were extracted for each of the 3 groups. As a group, nursing students held both positive and negative images of infants and perceived them both by their outward appearance and their “internal” characteristics. Non-nursing students tended to hold a positive image of infants, giving priority to their outward appearance. Early childhood education students showed an inclination to view infants protectively and hold an image based more on their inward characteristics.

本研究は、研究者らが所属する大学の学生の乳幼児に対するイメージの特徴を把握し、看護学科と他学科学生のもつイメージの比較を通じて小児看護学の教育課題の示唆を得ることを目的とした。調査対象は看護学科1年生54名、栄養学科1年生40名、社会福祉学科1年生52名および、児童学科1年生57名である。調査方法は自記式質問紙調査で、井上らが開発した子ども観のイメージ測定に有効な51組の形容詞対を使用した。調査時期は入学後間もない時期を避け、各学科の専門領域の学習が進行していない4月下旬から5月初旬をめどに実施した。分析対象は看護系学生、非看護系学生、保育系学生の3つのグループとし、因子分析（プロマックス回転）を行った。因子分析後、因子負荷量が0.4未満の項目を除去した結果、各学科で5因子34～42項目が抽出された。看護系学生がとらえる乳幼児のイメージは、肯定的・否定的側面とともに外見的・内面的イメージの両面をとらえる傾向が示された。非看護系学生がとらえるイメージは、肯定的で外見的イメージを優先する傾向が示された。保育系学生がとらえるイメージは、内面的イメージを優先し養護の必要な庇護する存在という傾向が示された。

キーワード：乳幼児のイメージ，看護系学生，非看護系学生，保育系学生，教育課題

I. 緒言

看護学生が乳幼児をどのようにイメージしているのかを把握することは、人間の成長・発達過程を教え学ばせる立場にとって重要な情報である。昨今の若者は社会構造の変化の影響を受け、その成長過程において子どもとの接触体験が乏しく、子どもに対する具体的なイメージをもつことが難しかったり、偏った捉え方をする傾向があるといわれる。このような状況は身近なところでも実感するが、看護学生の子ども観の育成は学生自身の成長過程に大きな影響を及ぼすものであり、コミュニケーションを基盤とする看護者の育成を考慮した場合、意義あることと考える。

本学は平成 18 年度より短期大学の教育課程から 4 年制大学に移行し、それに伴い研究者らも 4 年制大学教育における小児看護学を担当し、平成 20 年度より小児看護学の講義を開講している。より効果的な授業展開を行うためには、教育の対象である学生の理解を深めることが重要と認識しており、学生が乳幼児に対してどのようなイメージをもっているのかを把握することも必要と思われる。ところが、看護系の大学生を対象に乳幼児という年齢に焦点をあてた子どものイメージの調査は少なく¹⁾、十分な知見を得るには限界がある。そこで、看護系の学生と同一学部内における異学科の 1 年生および短大 1 年生がとらえる乳幼児のイメージを比較しながら、看護系大学の 1 年生がとらえるイメージの特徴を明らかにし、教育課題を検討する上での基礎資料を得たいと考えた。

II. 研究目的

本研究の目的は、研究者らが担当する小児看護学の教育評価の一端として行い、所属する大学・短期大学の 1 年生（保健福祉学部 3 学科および短大 1 学科）のもつ乳幼児に対するイメージの特徴を把握し、看護学科と他学科学生のもつイメージの比較を通じて小児看護学の教育課題の示唆を得ることである。

III. 研究方法

1. 調査対象

調査の対象は本学の保健福祉学部看護学科 1 年生 54 名、栄養学科 1 年生 40 名、社会福祉学科 1 年生 52 名および短期大学部児童学科 1 年生 57 名である。

2. 調査方法

調査方法は自記式質問紙調査で、井上ら²⁾が開発した子ども観のイメージ測定に有効な 51 組の形容詞対を使用した。この形容詞対は SD 法 7 段階の評定尺度で、7 をより肯定的なイメージ、1 をより否定的なイメージと設定するものである。

調査の実施は、学生が集合する講義教室において学科ごとに質問紙調査の説明を行い一斉配布した。調査協力が得られる場合には、その場での記載を依頼し、記載が終了した段階で回収を行った。

3. 調査時期

調査の時期は、入学後間もない緊張の強い時期を避け学生生活にある程度順応し、なおかつ各学科の専門領域の学習が進行していない時期の 4 月下旬から 5 月初旬をめどに、平成 20 年 4 月 24 日～ 5 月 13 日の期間の中で調査可能な日程を選択し随時実施した。

に実施する。

4. 分析方法

形容詞対のデータは、1～7 の評定を得点として数量化し分析した。統計学的検定には SPSS15.0 j for windows を使用し、形容詞対 51 項目について因子分析（プロマックス回転：斜交回転）を行った。因子の抽出には重み付けのない最小二乗法を用いた。因子数は固有値 1 以上の基準を設け、さらに因子の解釈の可能性も考慮して 5 因子とした。分析対象は、看護系学生として看護学科 54 名、非看護系学生として栄養学科と社会福祉学科の計 92 名、保育系学生として児童学科 54 名のデータであった。

5. 倫理的配慮

研究者の所属する大学倫理委員会の承認を得た上で、調査を依頼する学生には調査時に、文書と口頭

により研究主旨および無記名・自記式調査であることを説明した。具体的には、研究協力は任意であり協力しない場合でも不利益は生じないこと、成績評価には一切関係しないこと、調査結果は統計的に処理され個人の特長はされないこと、研究以外の目的で使用しないこと、得られた結果は公表の予定があることを説明し、同意した場合は回答を提出するように説明した。

IV. 結果

調査票の回収数(率)は看護系学生 54 名 (100)、非看護系学生 92 名 (100)、保育系学生 54 名 (95)。有効回答数(率)は看護系 54 (100)、非看護系 92 (100)、保育系 54 (100)であった。

分析は、看護系学生として看護学科 54 名、非看護系学生として栄養学科 40 名と社会福祉学科 52 名の計 92 名、保育系学生として児童学科 54 名のデータを対象に因子分析を行った。因子分析後、因子負荷量が 0.4 未満の項目を除去し、再度因子分析を行い、それぞれで 5 因子 34~42 項目が抽出された。因子負荷の結果は表 1~3 に示した。また、各学科の学生がとらえた 51 対の形容詞全体の平均値(±標準偏差)は看護系学生 4.88±0.29、非看護系学生 4.62±0.26、保育系学生 5.02±0.32 であり、各学科における 51 対の各形容詞の平均値は図 1 に示す通りであった。

看護系学生のグルー

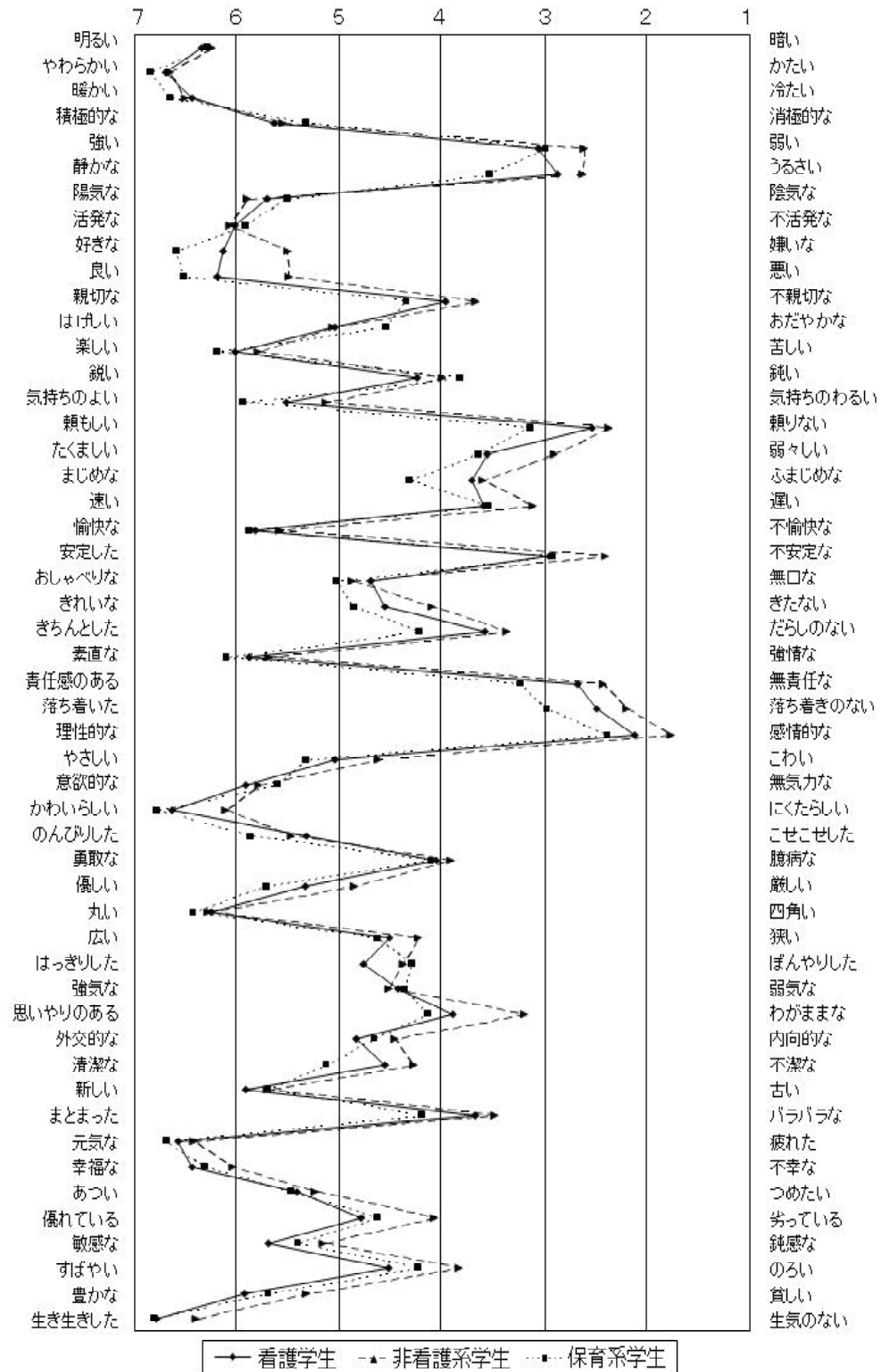


図1. 各学科の学生がとらえる乳幼児のイメージを表す形容詞51対の平均値

ブからは 5 因子 38 項目が抽出され、表 1 に示すような因子パターンが明らかになった (表 1)。第 1 因子は「豊かなー貧しい」、「陽気なー陰気な」などの形容詞対の負荷量および平均値が高いことから『豊かで陽気なイメージ』とした。第 2 因子は「頼もしいー頼りない」、「責任感のあるー無責任な」などの形容詞対の負荷量が高いものの、平均値は低いことから否定的イメージでとらえていることが考えられ『頼りなく無責任なイメージ』とした。第 3 因子は「暖かいー冷たい」、「やわらかいーかたい」などの形容詞対の負荷量および平均値が高いことから『暖かくやわらかいイメージ』とした。第 4 因子は「落ち着いたー落ち着きのない」、「静かなーうるさい」などの形容詞対の負荷量が高いものの、平均値は低いことから否定的イメージでとらえていることが考えられ『落ち着きのないうるさいイメージ』とした。第 5 因子は「はげしいーおだやかな」、「おしゃべりなー無口な」などの形容詞対の負荷量および平均値が高いことから『おしゃべりではげしいイメージ』とした。

非看護系学生のグループからは 5 因子 34 項目が抽出され、表 2 に示すような因子パターンが明らかになった (表 2)。第 1 因子は「かわいらしいーにくらしい」、「楽しいー苦しい」などの形容詞対の負荷量および平均値が高いことから『かわいらしく楽しいイメージ』とした。第 2 因子は「活発なー不活発な」、「陽気なー陰気な」などの形容詞対の負荷量および平均値が高いことから『活発で陽気なイメージ』とした。第 3 因子は「やさしいーこわい」、「きれいなーきたない」などの形容詞対の負荷量および平均値が高いことから『やさしくきれいなイメージ』とした。第 4 因子は「強いー弱い」、「たくましいー弱々しい」、「頼もしいー頼りない」などの形容詞対の負荷量が高いものの、平均値は低いことから否定的イメージでとらえていることが考えられ『弱々しく頼りないイメージ』とした。第 5 因子は「敏感なー鈍感な」、「鋭いー鈍い」などの形容詞対の負荷量および平均値が高いことから『敏感で鋭いイメージ』とした。

保育系学生のグループからは 5 因子 42 項目が抽出され、表 3 に示すような因子パターンが明らかになった (表 3)。第 1 因子は「たくましいー弱々しい」、「頼もしいー頼りない」などの形容詞対の負荷量が高いものの、平均値は低いことから否定的イメージでとらえていることが考えられ『弱々しく頼りないイメージ』とした。第 2 因子は「のんびりしたーこせこせした」、「豊かなー貧しい」などの形容詞対の負荷量および平均値が高いことから『のんびりして豊かなイメージ』とした。第 3 因子は「元気なー疲れた」、「陽気なー陰気な」などの形容詞対の負荷量および平均値が高いことから『元気で陽気なイメージ』とした。第 4 因子は「落ち着いたー落ち着きのない」、「静かなーうるさい」などの形容詞対の負荷量が高いものの、平均値は低いことから否定的イメージでとらえていることが考えられ『落ち着きのないうるさいイメージ』とした。第 5 因子は「敏感なー鈍感な」、「素直なー鈍感な」などの形容詞対の負荷量および平均値が高いことから『敏感で素直なイメージ』とした。

V. 考察

入学間もない時期における看護系学生がとらえる乳幼児に対するイメージは、肯定的側面と否定的側面が混在する内容であるとともに、見聞きしたものや容姿・態度などによる外見的イメージと性格や性質などをあらかず内面的イメージの両面をとらえていることが示された。すなわち、『豊かで陽気なイメージ』と『暖かくやわらかいイメージ』からは肯定的で外見的なイメージをとらえており、『頼りなく無責任なイメージ』と『落ち着きのないうるさいイメージ』、『おしゃべりではげしいイメージ』からは内面的側面を否定的なイメージでとらえていることがうかがわれた。主なイメージは、因子分析の固有値や回転後の因子寄与の割合から第 1・第 2 因子で占められており、表面的な部分に注目するような偏りがみられるのではないかという予想に反して、外見と内面、肯定的と否定的の両側面をとらえるバランスのとれたとらえ方をしているのではないかと思われる。

非看護系学生がとらえる乳幼児に対するイメージは、概ね肯定的で外見的イメージでとらえていることが示された。すなわち、因子分析の固有値や回転後の因子寄与の割合から、『かわいらしく楽しいイメージ』、『活発で陽気なイメージ』、『やさしくきれいなイメージ』という第 1～第 3 因子の内容が主なも

表1-①. 看護系学生の乳幼児に対するイメージの特徴(因子分析の結果)

表1-②. 形容詞対の平均値

因子名	形容詞対	因子負荷量					平均値
		因子1	因子2	因子3	因子4	因子5	
豊かで陽気なイメージ	豊かな-貧しい	.777					5.93
	陽気な-陰気な	.728					5.70
	好きな-嫌いな	.727					6.13
	愉快な-不愉快な	.715					5.82
	楽しい-苦しい	.661					6.02
	親切な-不親切な	.645					3.96
	活発な-不活発な	.630					6.02
	やさしい-こわい	.620					5.04
	優しい-厳しい	.609					5.33
	あつい-つめたい	.544					5.41
	幸福な-不幸な	.524					6.43
	良い-悪い	.461					6.19
	元気な-疲れた	.446					6.57
頼りなく無責任なイメージ	勇敢な-臆病な		.735				4.06
	頼もしい-頼りない		.658				2.53
	責任感のある-無責任な		.633				2.67
	はっきりした-ぼんやりした		.623				4.76
	たくましい-弱々しい		.567				3.56
	強気な-弱気な		.564				4.43
	きちんとした-たらしのない		.520				3.57
	思いやりのある-わがままな		.479				3.89
	広い-狭い		.444				4.50
	強い-弱い		.433				3.06
暖かくやわらかいイメージ	暖かい-冷たい			.720			6.43
	やわらかい-かたい			.674			6.69
	丸い-四角い			.587			6.24
	明るい-暗い			.490			6.33
	かわいらしい-にこらしい			.447			6.63
落ち着いたイメージ	落ち着いた-落ち着きのない				.790		2.48
	静かな-うるさい				.668		2.87
	理性的な-感情的な				.575		2.11
	清潔な-不潔な				.488		4.56
	まじめな-不まじめな				.414		3.70
おしゃべりではげしいイメージ	はげしい-おたやかな					.620	5.04
	おしゃべりな-無口な					.565	4.69
	速い-遅い					.476	3.59
	積極的な-消極的な					.455	5.63
	すばやい-のろい					.409	4.52
固有値		9.967	6.079	4.135	2.796	2.442	
回転後の因子寄与		8.473	5.795	5.427	3.793	3.317	

表2-①. 非看護系学生の乳幼児に対するイメージの特徴(因子分析の結果) 表2-②. 形容詞対の平均値

因子名	形容詞対	因子負荷量					平均値
		因子1	因子2	因子3	因子4	因子5	
かわいらしく楽しいイメージ	かわいらしい-にくらしい	.824					6.14
	楽しい-苦しい	.807					5.80
	好きな-嫌いな	.706					5.54
	良い-悪い	.595					5.52
	元気な-疲れた	.567					6.44
	幸福な-不幸な	.550					6.07
	あつい-冷たい	.540					5.25
	愉快な-不愉快な	.538					5.59
	気持ちの良い-	.466					5.17
活発で陽気なイメージ	活発な-不活発な		.739				6.05
	陽気な-陰気な		.571				5.87
	意欲的な-無気力な		.547				5.78
	明るい-暗い		.511				6.23
	はげしい-おたやかな		.470				5.05
	おしゃべりな-無口な		.463				4.88
	積極的な-消極的な		.444				5.54
やさしくきれいなイメージ	親切な-不親切な			.680			3.69
	やさしい-こわい			.668			4.64
	きれいな-きたない			.665			4.14
	まじめな-不まじめな			.602			3.60
	清潔な-不潔な			.599			4.30
	広い-狭い			.462			4.24
弱々しく頼りないイメージ	強い-弱い				.643		2.63
	たくましい-弱々しい				.595		2.91
	速い-遅い				.490		3.11
	頼もしい-頼りない				.465		2.37
	責任感のある-無責任な				.435		2.41
敏感で鋭いイメージ	敏感な-鈍感な					.795	5.20
	すばやい-のろい					.648	3.87
	鋭い-鈍い					.597	4.00
	豊かな-貧しい					.515	5.36
	まとまった-バラバラな					.453	3.50
	優れている-劣っている					.437	4.10
	勇敢な-臆病な					.405	3.92
固有値		9.696	5.772	3.391	1.841	1.403	
回転後の因子寄与		8.344	5.918	5.976	4.332	4.706	

表3-①. 保育系学生の乳幼児に対するイメージの特徴(因子分析の結果)

表3-②. 形容詞対の平均値

因子名	形容詞対	因子負荷量					平均値
		因子1	因子2	因子3	因子4	因子5	
弱々しく頼りないイメージ	たくましい-弱々しい	.808					3.65
	はっきりした-ぼんやりした	.736					4.30
	頼もしい-頼りない	.693					3.15
	安定した-不安定な	.683					2.93
	思いやりのある-わがままな	.642					4.15
	まじめな-不まじめな	.635					4.32
	勇敢な-臆病な	.615					4.11
	強気な-弱気な	.601					4.37
	速い-遅い	.590					3.56
	すばやい-のろい	.508					4.24
	責任感のある-無責任な	.441					3.24
意欲的な-無気力な	.403					5.61	
のんびりして豊かなイメージ	のんびりした-こせこせした		.814				5.87
	豊かな-貧しい		.722				5.70
	気持ちの良い-気持ちの悪い		.651				5.94
	新しい-古い		.602				5.70
	生き生きした-生氣のない		.532				5.94
	まとまった-バラバラな		.529				5.70
	あつい-つめたい		.526				6.82
	やわらかい-かたい		.520				4.20
	広い-狭い		.499				5.48
	幸福な-不幸な		.479				6.85
元気で陽気なイメージ	元気な-疲れた			.709			6.70
	陽気な-陰気な			.657			5.52
	良い-悪い			.639			6.52
	明るい-暗い			.618			6.30
	楽しい-苦しい			.583			6.20
	活発な-不活発な			.581			5.93
	好きな-嫌いな			.543			6.59
	かわいらしい-にくらしい			.509			6.80
	丸い-四角い			.410			6.43
落ち着いたイメージ	落ち着いた-落ち着きのない				.726		2.98
	静かな-うるさい				.686		3.54
	きれいな-きたない				.660		4.87
	理性的な-感情的な				.537		2.39
	きちんとした-たらしのない				.486		4.22
	清潔な-不潔な				.467		5.13
	親切な-不親切な				.449		4.36
敏感で素直なイメージ	敏感な-鈍感な					.678	5.41
	素直な-強情な					.559	6.11
	鋭い-鈍い					.441	3.83
	優しい-厳しい					.440	5.72
固有値	7.960	5.976	4.846	2.711	2.551		
回転後の因子寄与	6.313	6.188	5.898	4.938	3.101		

のであり、子どもらしさを代表するようなかわいらしくて快活でやさしいイメージをもっていることがうかがわれた。一方、内面的側面のとらえ方は弱々しく、頼りない、バラバラななど、どちらかという否定的なイメージでとらえる傾向がうかがわれた。

保育系学生がとらえる乳幼児に対するイメージは、非看護系学生がもつイメージとは対照的に、内面的イメージを優先する捉え方が示された。因子分析の固有値や回転後の因子寄与の割合から、『弱々しく頼りないイメージ』、『のんびりして豊かなイメージ』という第1・第2因子が主な内容を示していると考えられる。第1因子からは一見否定的なとらえ方をしているように思われるが、項目内容をみていくと決してそうではなく、庇護する存在というイメージをもっているように思われる。保育系の学生は入学前から乳幼児に対する興味関心を強くもつ傾向が推測され、子どもの存在を愛おしく思い養護する必要性を強く感じている表れではないかと考えられる。

我々は昨年、臨地実習を終了した看護系短期大学の3年生を対象に乳幼児のイメージの調査^{3) 4)}を行った。その結果、乳幼児の存在を肯定的に受け止めると同時に、容姿や感覚的な印象のみならず、個性や具体性、精神面を含む発達特性などをとらえる内容が示された。この結果と今回調査した看護系学生がとらえる乳幼児のイメージの特徴を比較すると、外見と内面、肯定的と否定的の両側面からとらえられているものの、個性や具体性につながる特徴には至らず容姿や感覚的な印象によるもの、あるいは思い込みによる印象は否めない。しかし、これらはいずれも固定的なイメージとはいいがたく、乳幼児との直接的な触れ合いや関わり経験が十分ではない現段階でのことと推測される。

以上の結果から、子どもと触れ合う機会の少ない最近の学生においては、子どもに対するイメージは乏しく偏りの生じる可能性もあり、子どもと触れ合う機会をつくる授業計画の必要性が示唆された。したがって、早期の段階から子どもへの興味をもつきっかけ作りや接触体験の機会を設ける必要があると考えており、学生の可能性を探求し拡大していけるような工夫が重要と思われる。

VI. 結論

1. 看護系学科の大学1年生がとらえる乳幼児に対するイメージは、肯定的・否定的の両側面とともに外見的・内面的イメージの両面からとらえていることが示された。
2. 非看護系学科の大学1年生がとらえる乳幼児に対するイメージは、概ね肯定的で外見的イメージを優先する捉え方が示された。
3. 保育系学科の短大1年生がとらえる乳幼児に対するイメージは、内面的イメージを優先し養護の必要な庇護する存在という捉え方が示された。

引用文献

- 1) 河上智香, 藤原千恵子, 上野恵美子, 他; 4年制看護系大学の学生が持つ子どものイメージの構造, 第34回日本看護学会集録集(看護教育), 103-105 (2003)
- 2) 井上正明, 小林利宣: 日本におけるSD法による研究分野とその形容詞対尺度構成の概観, 教育心理学研究, 33, 253-260 (1985)
- 3) 細野恵子, 上野美代子: 小児看護実習後の看護学生の乳幼児に対するイメージ, 市立名寄短期大学紀要, 41, 25-31 (2008)
- 4) 細野恵子, 上野美代子: 小児看護実習を終えた短大生の乳幼児に対するイメージの特徴, 日本小児看護学会第18回学術集会講演集, 101 (2008)